HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「手紙」という実験（1）：『三島由紀夫レター教室』と井原西鶴『万の文反古』、その断絶と連続
Author(s)	南, 陽子
Citation	北海道大学文学研究院紀要, 174, 1（右）-14（右）
Issue Date	2024-12-16
DOI	https://doi.org/10.14943/bfhhs.174.r1
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93786
Type	departmental bulletin paper
File Information	04_174_Minami.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

10.14943/bfhhs.174.r1

「手紙」という実験（1）

――『三島由紀夫レター教室』と井原西鶴『万の文反古』、その断絶と連続――

南　陽子

一、断片としての三島由紀夫

『三島由紀夫レター教室』は、全三十二章、全九十八通の手紙のやり取りにより、一つのストーリーが浮かび上がるよう構成された中編書簡体小説である。[i] 一九五〇年代の週刊雑誌創刊ブームを経て、週刊女性誌「女性自身」（光文社、一九六六年九月二十六日号～六七年五月十五日号）に一章ずつ連載された本作は、人気作家・三島由紀夫による後期娯楽作品の中でも際立った異色作であった。[ii]

連載当時、横尾忠則の挿絵を大きく中央に配した『レター教室』の各回は、あたかも自身もゴシップ記事の一つの

ように世俗的な誌面にぴたりと調和し、臨機応変に時事ネタを摂取して、「週刊誌連載」というメディアの特性を存分に活かしつつ連載されていた。[iii] 一九六七年一月新春特別号の誌面上、五人の作中人物は折よく年賀状をやり取りし、唐突に「謎」の手紙が混入されることで、小さな推理小説の渦が五人を佳境に運んで行く。伏線が錯綜し、ストーリーらしきものは脱線を重ね、同じ趣向の手紙は二回と繰り返されない。三島由紀夫のパブリック・イメージに大きく背反して、最終的にラブ・コメディーとして収束する本作品は、明るいユーモア小説であり、同時に実験小説の側面を色濃く帯びていたと考えられる。

三島由紀夫のパブリック・イメージ、すなわち「純文学」と呼ばれる代表作と病的に活動的な作者自身は、世間の関心を長く惹き続け、没後五十年を過ぎた現在でも作者に関する言説は巷間に無数に溢れている。「盾の会」結成前後に執筆された三島の娯楽小説が、作者の実生活への憶測に押され、作品として論じられる機会の少なかったことは止むを得ないのだろう。同時期に執筆されていた長編連載小説『豊饒の海』とこれら娯楽作品の共通項は、過剰ながら簡潔という、文章の端正さのみであると言っても過言ではない。緻密な描写は鳴りを潜め、人物はろくに内省せず、口語体を基調とした軽佻浮薄な文体と言動が我勝ちに走り抜ける。その不真面目と悪ふざけは、売文のための割り切りであったのか、それとも計算された職業作家の態度であったのか。

本作品に関する数少ない言説のうち、ちくま文庫版『レター教室』解説で群ようこは本作を「いちばん最初に、手紙のやりとりだけで構成されているこの作品を読んだとき、実は彼の他の作品ほどのめり込めなかった。このような形態の作品を読み慣れていなかったこともあった」と評している。群は長く三島のファンでありながら『レター教室』の存在を知らず、一九七四年刊行の三島由紀夫全集によって本作を読んだと述懐している。部分的に書簡が利用され

た作品を含むと、書簡体を採る小説は時代に関係なく決して珍しいものではない。「手紙のやりとりだけで構成されている」作品ならば、三島は早く一九五一年に『愛の往復書簡』で阿部艶子と共作の書簡体小説を手掛けている。[iv] 群ようこが『レター教室』以前に書簡体の小説を読んだことが無かったはずはないだろう。「このような形態の作品を読み慣れていなかった」とは、単なる手紙の形式のことを指すのでは恐らくない。『レター教室』の羅列された書簡の連続は明らかに異例の内容と方法を採り、各章の奇抜な設定はときに奇抜が過ぎて読者を当惑させる。『三島由紀夫事典』（明治書院、一九七六年）は『レター教室』項目説明で人物の述懐を「部分的には三島らしい機知が感じられるが、全体的には平凡な手紙集。」と断じるが、その言葉には「純文学」の称揚と、娯楽作品への蔑視、ないし軽視が含まれていたのではなかったか。

もしかするとそれらは、週刊誌連載時ならば一回限りの読み捨てであっても成立し得たナンセンスの断片が、単行本化された紙上で連続的に読まれると、散漫な「失敗作」に一変するという発見だったのかもしれない。一段落につき主に長めの二文で構成され、スタッカートのように短文を織り交ぜた『レター教室』の本文は、書籍で組まれる通常の小説の行長で読むよりも、一行十七字四段組みの雑誌特有の構成によく馴染んでいる。頻繁に折り返される視線の動きが本文にリズムとスピードをもたらして、読みやすさ、もしくは「読み飛ばしやすさ」が生まれる。雑誌媒体にとって「読み飛ばしやすさ」とは、疑うべくもない正義だ。

詩人としての三島由紀夫と、古今の作品を論じた数々の文芸論、作品ごとに変化する文体を思い出せば、このリズムとスピードは偶然ではなく、故意であったように思えてくるだろう。「暗い汲取便所」とも「桃色の、ポップコーン」とも形容された両極的な横尾忠則の挿絵と、[v] 挿絵に比肩して際物めいた本文とが、覗き見趣味の記事群と同じ段組み

レイアウトによって配される。挿絵、本文、レイアウトの三点が揃うことで、見開き一ページという一つの完結した世界が、毎週の読者に供されるのである。

一方で、週刊誌連載時の創意と臨場感を享受できない後の読者たちは、四方に散らかった書簡の断片を、細い糸でようやく一列に繋ぎ合わせて読むことしかできない。誌面連載時に各手紙に添えられていた五人の横顔付き見出し部分は、単行本への収載時、中央の挿絵と共に全て削除され、わずかに見出し部分のフォントの差異があるものの、書籍の中では文字テキストだけが延々と単調に羅列される。加えて、三島由紀夫全集の一行四十三字、ちくま文庫の一行三十八字という通例の書籍の行長は、仮名の多い口語調の手紙文を間延びさせ、冗長に感じさせるのに充分な要素である。『三島由紀夫全集』校訂によると、単行本化される際、初出の改行箇所には複数の追い込みの指示が入っており、単行本では行長を長くとる調整が重ねて行われていたことが確認できる。[vi] 一律化された紙面に落とされたことで、悪趣味という名の芸術は色褪せ、悪ふざけは空回り、毒が抜かれた形骸だけが残る。もはや両者は同じテキストではない。

誌面連載と単行本の差異は、物理的な視覚上の「読む要素」に限らない。九十八通に及ぶ膨大な量の書簡の連続に、一読して一貫したストーリーを見出すのは誰であれ難しい作業であろう。伏線の回収を確認し、作中人物の心理の機微に気付き、突飛な書簡の重要な位置づけに納得するには、数回に渡る全編の通読が必要である。娯楽作品でありながら読者の集中力を考慮に入れず、読む努力を読者に強いるテキスト、それは「失敗作」と呼ばれるための一つの条件であったはずだ。

純文学の代名詞となった代表作と、忘れられた娯楽作品。ペルソナを使い分ける二人の三島由紀夫と、二つの『レ

ター教室』。連続で読むのか、それとも「断片」として読むのか。どちらか一方だけが正解であるとは限らない。比較し検討できる対象は、二つでなく複数に及ぶ可能性もある。本稿ではその一回目の検討として「手紙」という断片の、最初の一通を開封することから始めてみる。

二、手紙のなかの手紙――客観化される「告白」――

『レター教室』の連載第一回は、作者から読者へ書かれた手紙として、冒頭「五人の登場人物がかわるがわる書く手紙をお目にかけ、それがそのまま、文例ともなり、お手本ともなる」という前書きから始まる。手紙の文例、手本集は、女性向けの実用的な読み物の典型であり、近世以来、女訓物などの出版物が多く刊行されてきた。女性雑誌の誌面上に、手紙の文範が示されるのは自然な誌面構成であろう。ただし、『レター教室』第一回の「そのまま、文例ともなり、お手本ともなる」という前言に反して、その内容の数々は、誰かに宛てて書く実用的な「手紙のお手本」には程遠いものだった。

『レター教室』第一回で紹介された主要登場人物、主な手紙の「書き手」は五人の男女「氷ママ子」「山トビ夫」「空ミツ子」「炎タケル」「丸トラ一」である。五人の間を手紙が往来し、事件が起こり、五人の関係性の変化していく経緯が『レター教室』の主要なストーリーを構成するが、厳密に数えると手紙の「書き手」はこの五人だけではない。連載第二回目、小説部分の本編となる一通目の手紙では、主要人物ではない、挿入された人物による「失敗した手紙」を、「お手本」として衆目にさらすことが中心となる。主要人物「氷ママ子」から「山トビ夫」に宛てた一通目のやり

取りは、「愛の告白」の手紙を自分の手紙に同封した手紙、つまり、自分宛てのラブ・レターを第三者に見せて勝手な論評を加えるという、悪趣味極まりない設定を採る。

「古風なラブ・レター」と題された第二回は、宛先へ語り掛ける会話調で書かれた「氷ママ子より山トビ夫への手紙」中に、銀行員から差し出された氷ママ子宛てのラブ・レターが挿入され、その返信として出された「山トビ夫から氷ママ子への返事」の中に、山トビ夫の手による銀行員への返事の文例が示される。銀行員から来たラブ・レターへの対処に窮した氷ママ子が、山トビ夫に返事の代筆を依頼したという設定を採るのである。

手紙の中に手紙が入れ子とされる書簡中書簡と、代筆文の挿入が全体の冒頭となる章に設定され、一章のうちに合計四通の手紙文が並ぶ。本来なら背景と設定の説明から始まるであろう中長編小説の冒頭部として、書簡中書簡の方法は唐突で複雑、技巧的な印象を与えるものである。しかしこの方法は前半を中心に、中核となる「謎」の手紙、最終章の「作者から読者への手紙」に至るまで、全三十二章中の十三章において使われており、意識的に用いられていたものと分かる。

丁寧語を交えた会話調で喋るように書かれ、書簡用語をほぼ使わない主要人物たちのやり取りの間にあって、手紙文の慣例「小生」の一人称を使い、硬質な書き言葉で書かれた銀行員の手紙は「古風な」と称され、他と明確に書き分けられた文体を採っている。この銀行員のラブ・レターを論評した、作中人物の恋愛論と人物論が第二回の中心を形作る。「森羅万象、自分の目で見たことがない人」（氷ママ子より山トビ夫への手紙）、「こういう手紙を書く人間は、絶対に美男子ではありえない」（山トビ夫より氷ママ子への手紙）と、自分の思いの丈を一方的に綴ったラブ・レターは、主要人物によって容姿から人間性まで散々な論評を受ける。加えて、断りの返事を代筆した文例が最後に挿入さ

れ、計四通の手紙でこの一章は構成されることになる。

続く第三回の「有名人へのファン・レター」では、「氷ママ子」「山トビ夫」と対となる「空ミツ子」「炎タケル」の間で、劇作家へのファン・レターを代筆する依頼がやり取りされ、書簡中に炎タケルによる長文の代筆文が引用される。空ミツ子が自分で書いたファン・レターの引用を含めると、一つの章にやはり二つの書簡中書簡が使われ、かつこれらがファン・レターの「お手本」に関する失敗例と成功例として示される。宛先である劇作家は、インテリを演じた熱心で冗長なファン・レターを無視し、端的な誘惑の手紙に応じた。真面目に書いた「失敗例」の文範は、ラブ・レターとファン・レターのどちらも肝心の「宛先」からは相手にされず、書き手の意図は的外れに終わる。

第二回と第三回は主要登場人物のペアを紹介する冒頭の章として対の関係をなしているが、どちらも作中人物への批評がなされ、手紙の内容の客観化が図られる点で、両者には類似的な視点が見られる。「書簡中書簡」という様式、書き手による「内面の告白」を第三者が批評するという態度は、最終章の女性ファンの手紙まで続く『レター教室』の基本姿勢であった。

書簡中書簡は繰り返し使われるが、その都度、設定と引用のされ方は大きく変化する。かつて自分が書いた手紙を自ら論評し、「第三者に見せて、笑い物にして」欲しいと、宛先にも論評を求める（第八回「愛を裏切った男への脅迫状」）。一心に喜びを綴った手紙は、一方には感動的で、また一方には白々しい（第九回「出産の通知」）。往信の内容を間接的に推測させる書き方によって、往信の弁を難じる論評が返信される（第十回「招待を断る手紙」）。「内面の告白」が宛先にどう読まれるかは、受け取り手が誰かによってどのようにでも変わり、書いた本人ですら、過去の手紙の中に別人を見出す瞬間がある。

近代文学における書簡体小説の例として『こころ』後半部の「先生の手紙」を挙げるならば、書中で先生は「私」からの批判を恐れる一方、先生の告白の内容が、物語内部で誰かから批判されることはない。先生を批判しているのは他ならぬ「先生」自身であり、だからこそ『こころ』は近代小説の礎であり得たのだろう。

『レター教室』の大部分を構成する他者からの批判、相対化され続ける告白、思いもよらぬ返信、書簡体小説として決して一般的でも模範的でも「ない」これらの設定には、近代文学の礎とは異なった、別の種類の雛型の存在が想定されるのではないか。『レター教室』との類似性が考えられるテキストとして、本稿では井原西鶴『万の文反古』における「評文」の方法と、巻三に見る書簡中書簡の方法を起点に、両者の連続性を検討してみたい。

三、井原西鶴『万の文反古』――「人心」を映す手紙――

元禄九（一六九六）年、井原西鶴の没後に刊行された『万の文反古』は、一通一編の短編形式で十七人の書簡が総覧される書簡体小説集である。書簡体の形式を採る出版物には、和歌を中心に恋文のやり取りを物語化した読み物と、挨拶文などを並べた実用文書である文範集などがすでに存在したが、『万の文反古』は両者を敢えて折衷したような性格を帯びている。用件を伝えるための事務的な実用文書のような文面の中に、破産を告白し、借金を申し込み、罪を懺悔する書き手たちの人となり、歩んできた半生などが窺い知れるよう情報が添加され、散文的な内容に「をかしき噂、かなしき沙汰、あるひは嬉しきはじめ」などの、「人の心も見えわた」（『文反古』序文）るさまが描かれる。このとき『万の文反古』の基本様式は、章題、副題、作中人物が書いた手紙の本文、後付け、最後に「此文を考みるに」

もしくは「此文の子細を考見るに」から始まる百字前後の「評文」で構成されている。

たとえば冒頭の巻一の一「世帯の大事は正月仕舞」を挙げると、書簡本文は年末の商売仕舞の指示から始まり、正月支度と挨拶回りの作法が、家賃の払い方、もち米の買い方、年賀に配る年玉の品の指定などが網羅的に列挙され、膨大な作業リストのような文面が書付けられる。書簡の末部に至ると、掛け売りを踏み倒す方法が伝授され、夜逃げの算段を明かし、親から継いだ借金の利息を嘆くことで、これが当家の破産を「告白」する手紙であったことが判明する。作業リストの内容が全て節約の指示であり、それらが商家の心得であったと同時に、困窮する経済状況を物語っていたことが、最後まで書簡を読むことで自ずと知れるのである。後付けの「極月十八日　大和屋藤五郎殿　同藤四郎」から、この手紙は十二月後半の支払時期に、大和屋の主人「藤四郎」から息子の「大和屋藤五郎」に出されたものであったと分かる。始末の列挙、商売の具体的な指示が並ぶ書簡本文は、父から息子に宛てた命令として商家訓のような体裁を採るが、最後に走り書きされる破産の事実によって、訓戒する親父の弁の「からくり」が明かされるのである。[vii]

巻一の一の最後に付された評文は「作者」の立場から大和屋の状況をまとめつつ、「是をおもふに人の内証は大からくり也」と商人の生活が総括される。作業リストの「からくり」と、借金の利息を返しながら商売をやりくりする「からくり」、外からは順風満帆に見えた大店が、ある日突然、商売をたたむという「からくり」、他人の台所事情は誰にも分からない。堂島米市場を中心に、高度な貨幣経済化が最も早く進んでいた商業都市大坂にあって、金銭の動きに翻弄される日常とは、彼らの生活そのものであったはずだ。

和歌や書簡に親和性の高い「恋」という題材は、十七世紀に流行した俳諧の影響を受けて「世事」「世話」[viii]の類聚へ

と一部が入れ替わっていった。一般町人の生活と経済活動が小さくないテーマとして取り上げられ、その心理と言動、観察と教訓が多数の掌話となり、編纂されたものを「町人物」と呼んでいる。『万の文反古』に先行し、類似本文を持つ貞享四年（一六八七）の『日本永代蔵』は、商人層を発見した文学テキストとして最も大部で代表的な作品である。『万の文反古』中の話もまた、出家の手紙二通、敵討ちの手紙一通、祖母が因果を語る手紙一通、遊女の手紙一通をのぞくと、残りの十二章で主に商人・町人層が書き手に設定され、書簡の内容には何らかの形で金銭にまつわる話題が含まれる。遊女から送られた手紙ですら、「恋」を装って客からの集銭を狙う手紙であり、経済活動への興味はほぼ一貫されている。

『レター教室』中の奇妙な手紙の一つに、第五回「借金の申し込み」の手紙があった。二人の青年が正反対の書き方で借金を申し込み、それぞれがやはり論評されつつ、一方は拒絶、一方は承諾の返事を得る第五回は、性愛に関する様々な手紙が行き交う第一回から第四回までの流れのなかで読むと、唐突に散文的な内容が挿入されたように見える。しかし断絶されたように見えるが、第五回は五人目の主要人物「丸トラ一」の初登場回であり、カラーテレビを買うための三万円の無心が後半への伏線となるため、『レター教室』の中で決して必要のない章ではない。丸トラ一は徹底して間抜けの役を演じ、炎タケルはくどいほど誠実に実直な手紙を書いて、両者は対照的な対をなしている。「世の中は、何でも当たって砕けろ、といいますから、ちょっとためしにお便りしてみました」（丸トラ一から氷ママ子への手紙）という楽観的すぎる丸トラ一と、金銭への哲学を並べ立て「青春のバカバカしさに対して客観的な立場に立つことのできる、知性ゆたかな人が、それをまるで、庭土の上に戸惑うアリのようにながめながら、軽蔑と気まぐれから、一つまみの砂糖を投げ与えるように、お金を貸してくださることを夢みています」（炎タケルから山トビ夫への手紙）

と嘆願する炎タケルは、不真面目と真面目という両極ながら、どちらも明らかに戯画的な存在である。

キャラクター付けの過剰さと畳みかけられる言葉は三島由紀夫本人の個性でもあっただろうが、同時に西鶴の浮世草子に特長的な方法でもあった。金銭にだらしない「息子」の造形は浮世草子の定番であり、『文反古』内だけに限っても巻一の二「栄花の引込所」、巻四の三「人のしらぬ祖母の埋み金」などに類型を見ることができる。また、同じ『文反古』巻一の三「百三十里の所を拾匁の無心」では、反省の弁を長々と並べたのちに、書き手は郷里に帰るための費用を、宛先である兄に無心する。巻一の一において親父の節約の指示が徹底して羅列されたのと同様に、借金を請うための「反省」と「言い訳」の羅列は、あまりの過剰さと発言の矛盾ゆえに、書簡の書き手を戯画的な存在に見せるものだった。

この巻一の三の末部には、家業を疎かにすることへの批判と資本を得ることの難しさ、「他人のかたへ銭一文の事にてもいひ難し」という、金を借りようとする書き手の厚顔さを難じた評文が添えられる。評文は書簡内の状況に補足の説明を加えるとともに、書き手が「言わなかったこと」や「誤魔化したこと」、「気付いていない矛盾」を他人の目からはっきりと言葉にして指摘する。丸トラ一の道化ぶりを「現代青年最低心理の研究」（氷ママ子から丸トラ一への手紙）と笑い、炎タケルに「しかしこの先、同じ手できてもダメですよ」（山トビ夫から炎タケルへの手紙）と釘を刺す『レター教室』第五回の返信は、西鶴が世帯人情を映しながら説いた訓戒の数々と、遠く離れて相似形をなしてはいなかったか。

『文反古』はさらに、巻三の一「京都のはな嫌ひ」において様式として書簡中書簡の方法を用いている。自分が書いたラブ・レターを手紙の中に引用してみせる点で『レター教室』第八回「愛を裏切った男への脅迫状」にも類似し、

内容面では男性から男性に宛てたラブ・レターの引用であるという点で、第七回「同性への愛の告白」に最も近似する話である。巻三の一は、西国に逗留中の僧が通りすがりに見初めた美童へラブ・レターを送った経緯を友人に報告する書簡として綴られている。書簡中書簡となるラブ・レター部分では、修辞的な美辞麗句のありたけが全て並べられ、少年への賛美が過剰に展開される。このラブ・レター部分は狂詩から引き写された引用であることが分かっており、そこに戯画性が意図されていたことは疑い得ない。

『レター教室』第七回「同性への愛の告白」中の、炎タケルが通りすがりに男優から渡されたラブ・レターは、タケルへの男性的な「肉体への賛美」（第一回「古風なラブ・レター」）を書き並べたものだった。この書簡中書簡は、タケルにナルシシズムを発見させ、三島由紀夫という作者自身へのパロディとすら読めるものである。これを入れ子として、「他人の問題を客観的に見てくださる方」だから、「僕の赤裸々な心境もお話ししたい」（炎タケルから氷ママ子への手紙）と申し添えて送られた奇妙な手紙は、主観と客観のあいだを自由に行き来して、『レター教室』に一つのアクセントを刻んでいた。

『レター教室』と『文反古』の接点は、直接的な引用関係によるものではない。しかしながら、悪ふざけとサービス精神、過剰でありながら繊細、軽薄でありつつ深淵という態度が、どちらにもこれほど溢れているのを目の前にすると、三島由紀夫と西鶴の間に断絶されつつ連続しているものを見出すのは、それほど無理のある試みではなかったと思われるのである。

四、三島由紀夫という物語

三島由紀夫という、かつてこの上なく現代的な存在だった作家が、広く深く古典を愛した作家であったことは周知のとおりである。王朝物語に小説の構想を採り、古典観劇は習慣であり日常、少年時代から自ら能と歌舞伎を創作して自らが演じる。大正末年生まれの男性作家として、曲亭馬琴を筆頭とする近世後期の文芸全般は、途切れず連続的に享受されてきたものであったはずだ。一九五九年の『不道徳教育講座』前書きはもちろん、三島由紀夫は井原西鶴についてもたびたび断片的な発言を残している。[ix] しかし『日本文学小史』が「西鶴」を目録に立てたまま中断を余儀なくされたため、まとまった言及は残されていない。

主に自然主義的な理解によって評価されていた当時の井原西鶴の受容の方法として、本稿の指摘する『万の文反古』と『レター教室』の接点は、日陰に隠れていた部分であると言えよう。後期娯楽作品『レター教室』の大衆性は、純文学称揚の文学界にあって等閑視されてきた。井原西鶴の理解と受容もまた、同じ陰に隠れて一面だけが評価されてきたためである。三島由紀夫本人も、その類似性にどこまで意識的であったかは窺い知れない。

どちらも劣らず多筆で多面的な二人の作家が持つ、幾つもの接点を一度に説明することは難しい。『レター教室』と『文反古』、微細なものも含めると両作品には検討の余地がまだ多く残されている。次論では、より具体的な両作品の方法と、そこから考えられる様々についてさらに考察を進めたい。

注

i　初出原題『三島レター教室　手紙の輪舞』。以下、拙稿では『レター教室』とし、引用本文は「女性自身」連載時の初出テキストによった。週刊女性雑誌「女性自身」に連載後、一九六八年に新潮社より『三島由紀夫レター教室』の題で単行本化、絶版を経て『三島由紀夫全集』十六集（新潮社、一九七四）に収録された。一九六八（昭和四十三）年は三島由紀夫四十三歳、『豊饒の海』を「新潮」に連載する傍ら、楯の会を結成した年に当る。

ii　ここでは『三島由紀夫小百科』「エンターテイメントとしての三島由紀夫」（水声社、二〇二一）の分類にならい、後期娯楽作品を一九六〇年代の『肉体の学校』（「マドモアゼル」小学館、一九六三年一月号～一二月号）、『音楽』（「婦人公論」中央公論社、一九六四年一月号～一二月号）、『複雑な彼』（「女性セブン」小学館、一九六六年一月一日号～七月二十日号）、『夜会服』（「マドモアゼル」小学館、一九六六年九月号～六七年八月号）、『命売ります』（「週刊プレイボーイ」集英社、一九六八年五月二十一日号～十月八日号）などの雑誌連載作品を主に指すこととする。『レター教室』『夜会服』『命売ります』の三作品は、『三島由紀夫全集』十六巻解題にも「エンターテイメント三篇」と称され収録される。

iii　竹内佳代「「女性自身」のなかの『三島由紀夫レター教室』――女性誌連載という併走」（『語文』一五六、二〇一六年十二月）は、女性週刊誌に連載されたことから、同時代の女性読者を意識した恋愛結婚の価値意識の変遷について論じる。

iv　「婦人公論」一九五一年四月、六月号掲載。男性主人公の手紙を三島、女性主人公の手紙を阿部が執筆し、二人の手紙が交互に行き交いながら時間軸が進行する設定を採る。

v　三島由紀夫、生前未発表原稿「ポップコーンの心霊術――横尾忠則論」『横尾忠則そしてインド篠山紀信』（駸々堂、一九七六）、引用は『三島由紀夫全集』三十五巻による。

vi　『三島由紀夫全集』十六巻、校訂

vii　拙稿「『万の文反古』B系列の矛盾と笑い――「書簡体小説」の趣向と効果について――」『近世文藝』九四、二〇一一年七月

viii　『万の文反古』初刊本は、題箋に「世話文章」と副題を載せる。

ix　『三島由紀夫事典』（明治書院、一九七六年）は「井原西鶴」の項目を立て、随筆を中心に発言を拾うが、『三島由紀夫小百科』（水声社、二〇二一）、『三島由紀夫事典』（勉誠社、二〇〇〇）では、西鶴は立項されていない。